

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

祝第50号 (令和2年11月15日)

読者数：655名(募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

HP：<https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

特集：広島市のサッカー場建設計画に苦言を呈す

あなたは、孫子のためにどちらを選択しますか？



提案4. 公共施設の再整備

施設を再編するにあたって、「平和を生み出す工場」であることを求める。有機的な機能構成のもとで段階的に整備を続け、世界のこどもから青少年が集い最先端のメディアを通じて世界の施設とネットワークし、自他の歴史・文化を自由に情報のやりとりができ、学習し、使いこなせる施設群とする。

○広島市中央公園を考える⑩

中央公園ランドデザインの提案から抜粋



○特別寄稿2

大田洋子「文学碑」受難



○読者からの投稿

中央公園西側エリア 作業風景

目次

- 巻頭言：広島市民は本当に中央公園の新サッカー場建設を歓迎しているのか……
広島諸事・地域再生研究所主宰 石丸紀興
- 特別寄稿1：中央公園は「空き地」ではない…… 都市計画家 松波龍一
- 特別寄稿2：大田洋子「文学碑」受難…… 広島文学資料保存の会代表 土屋時子
- 特別寄稿3：巨大な複合施設が地域の賑わいになる条件……
ダブルスネットワーク(株)代表 若本 修治
- ひろしまのまちづくりの動き
・サッカー場建設費が9月市議会を通過、事業者公募
- ほっとコーナー：online 話奏会(わそうかい)…… 左手ピアニスト 瀬川泰代
- 広島市中央公園を考える⑩：中央公園ランドデザイン…… 建築家 前岡智之
- 街角ウォッチング：私有空間を生かしたまちづくり……
安田女子大学教授 藤本和男
- 読者からの投稿：中央公園はだれのもの…… 読者 六百田裕子
- 編集後記：広島サッカー場をPRできない理由…… 編集委員 瀧口信二

□ 巻頭言

広島市民は本当に中央公園の新サッカー場建設を歓迎しているのか

広島諸事・地域再生研究所主宰
石丸紀興



はじめに

先日の新聞（2020・8・28）で、新サッカー場建設に260億円を計上するという記事が1面トップに掲載された。これは突然ではなく今までの成り行きから言えば当然の一つの結末である。すでに中央公園北西部における発掘調査も着々と進められていて、後に引き返せないような動きが蓄積されている。ここに新たに注意を喚起し、新たな問題提起を行うものである。

1. 少しだけ経過を辿ろう

昨年末に旧陸軍被服支廠の解体問題で広島県が広く意見を募集したことは記憶に残るようなことであった。まちづくりの分野でパブリックコメントというやり方であり、すでにかなり以前から取り入れられていて、広島市では2020年2月から3月3日まで「中央公園サッカースタジアム（仮称）基本計画（素案）に対する意見募集」として意見を公募した。その結果を広島市の[ホームページ](#)（*リンク参照）で公表している。これによれば応募は305件（167人・団体）であり、「意見の趣旨を基本計画の案に反映させるもの」33件、「既に意見の趣旨が基本計画に盛り込まれているもの」72件、「今後のサッカースタジアム建設の検討等において留意または参考するもの」200件となっている。私も意見書を提出したのでどのように扱われたのかを探ってみたい。

2. 果たしてこの配置計画でスタジアムが成立するのであろうか

実はこの配置計画は当初中央公園の北部で東側に置かれていたが（上図参照）、この計画を突然そのまま西側に移動させて改定案（下図参照）となった。通常、配置計画を検討するならば、これだけ大幅に移動させれば平面計画もエントランスとか避難計画とか大幅に変わるものであり、そのままずらせば成立するというものではない。

そして設計でわかることは、このスタジアムの周囲には余地（クリアランス）がほとんどなく、模型で見るように無理矢理押し込めて道路際一杯に計画されており、もし火災とか事故とかが発生したとき避難や救助ができるのか。

新しくできた神宮のオリンピックスタジアムと比較してみるとよい。そもそもこの場所で3万人のスタジアムを計画することができるのか、根本的な問題があろう。^{*1}

それはさらに北側の市営中層住宅と近接していることも問題であり、立ちのぼるような大きな音の発生源を目の前にして果たして静穏な生活が可能であろうか。この公営住宅はいずれ除却されるから構わないであろうという乱暴な回答でよいはずはない。（耐用年限は令和7年度までとされているが、現在のところ建て替え計画は存在しない）

3. 広島の本（もと）の地をこのように扱ってよいのであろうか

計画される新スタジアムは、中央公園とされるが、その地は基（もと）地といわれる基町であり、そこは城下町広島発祥の地であり、特別の場所である。西欧の歴史的な都市では通常アルテシユタット（オールドタウン、旧城下町）と言われたりする場所は、道路は狭いが歩行者中心で様々な遺跡や痕跡を維持しながら独特の場所としている場合が多い。

それは開発しにくいというよりは、市民の出自の場所として敬意を払い、大切に扱っているのである。広島歴史学者は果たしてどう考えているのであろうか。新たな建設計画を受け入れるにしても何らかのコメントを聞きたいところである。

現在、本来ならば3~4年以上かけて丁寧に遺跡を見つけていこうとすべきであり、開発のための無造作な発掘調査を進めるべきではない。^{*2} かつての城下町の一画であり、明治維新後は軍都として軍事施設が集積し、被爆によって多くは壊滅したが、そこから当時の逼迫した住宅不足に応える場所となり、いよいよ広島戦後復興を終えようとして、そこに多大な費用と



困難克服のエネルギーを投入して再開発を進め、ようやく中央公園が成立したのである。

まさにこれは広島市の歴史の重要な物語であり、単純に公園の北部地域が空地、大きな空いた場所であるなどという判断が成立するものではない。歴史学者はなぜそのことを言わないのか。広島に歴史学者がいなくなってしまうのか。広島を愛する人たちはなぜそのことに気づかないのか。私自身は「間違っても重要な遺跡を闇に葬るべきはない」と警告したが、担当部署から実質的な誠意ある回答は頂いていない。

4. 多くの情報が開示されていないではないか

提出した意見書に対して発表されている「意見募集の結果」は、基本計画に反対す内容も要望にすり替えられ、体よくまとめられてしまっている。それは仕方ないにしても、基本計画における多くの基本的な情報が開示されていないことは大問題である。とりわけ現在のエディオンスタジアムとの競合、経営的に大きな赤字が出現しないのかという収支問題、サッカー競技が終了した後の交通問題、とりわけリムジンバスへの遅延問題、市内交通の混乱問題など情報不足は著しい。「善処します」では済まされない問題である。現在西風新都で試合が終わったあと周辺は45～90分程度の交通渋滞は稀ではない。これに巻き込まれると予定も何もあったものではない。都市の中心部では条件が違うと云うが、アウェーチームの応援観客が車で大挙して来場することを禁止することはできない。希望的な観測ではなく冷静な客観的なデータの説明が欲しい。これは先になって悔やんでも取り返しがつかないのである。

5. 最後に言いたい

色々と問題点を指摘したが、決してサッカー場建設を基本的に反対しているわけではない。ヨーロッパでは立地場所やサッカー場デザインなど様々な工夫をして建設している。放置されていた土地をうまく利用したり、結果的にお荷物にならない軽い構造(単価も安く、いざとなれば簡単に除却できる)を取り入れたり、民間施設とうまく合体させたり、まさにSDGsの計画を実現している。関係者は外国に施設見学の視察に行っているはずであるが、果たして何を見てきたのか。後になって何十億円が無駄な投資であったとされないように、そして広島市の計画が世界に誇れるようなコンセプトではないと言われぬように、今、慌てて建設を急ぐべきではなく、じっくりと再考すべきではないか。

^{*1}全国的に、世界的に、このような都心の限られた規模の土地に大規模集客施設を計画している事例があるのか。

^{*2}現在進められている発掘調査は、遺跡の原状究明調査とはいえ、価値ある物を丁寧に見つけ尊重しようという営為ではない。

□ 特別寄稿ー1 中央公園は「空き地」ではない

都市計画家 松波龍一

街は歴史によって作られる。

と、他愛もない御託を述べてもしかたがないが、少なくともあなた一人のアイデアによって作られるのではない。

サッカースタジアム本体のことはともかく、その建設が予定されている広島市中央公園について見てみても、そのことがしみじみと実感できる。この年表(*リンク参照)は、主に中央公園とその周辺での主要施設の建設、廃止をまとめてみたものである。広島城内堀内と、大手郭、西の丸、三の丸が西練兵場と空き地になって以降、これまでの間に多くの変遷があった。都市計画公園として計画決定された1946年から後をみても、テニスコートや旧児童図書館にはじまって2024年までに着手といわれている市営基町アパートの建て替えに至るおよそ80年間に、おびただしい営為が積み重ねられてきた。そのどれもに多くの人がかかわり、その度ごとに様々な論議と紆余曲折があったはずである。そのことには、敬意を表したい。

問題なのは、そこに一貫した目標像が感じられないということだ。つねに中央公園が広大な空き地としてしか見られていなかったのではないか。今年の春に広島市が発表した「中央公園の今後の活用に係る基本方針」では「都心に立地する広大な空間で、復興のシンボルであり、水と緑の豊かな空間、多様な人々が集う交流空間である」として、「にぎわいの空間」「くつろぎの空間」「文化を醸し出す空間」という前のめりの理念を掲げているものの、この空間を広島の資産として活かすために必要なのは、これまでの営為の総括に立った課題認識である。

結果的に、これまでの投資が豊かな回遊性を分断し続け、隣接する都心機能と乖離し続け、閉鎖的な公園の中に様々な公園施設が脈絡なく無秩序に立地してしまった。そこで求められたのは、個々の施設計画が拠り所とすべき大方針ではなかったか。平和公園、太田川、中央公園というオープンスペースの一体化、都心の県庁やリーガやバスセンターやそごうや本通りなどから自由に

アクセスできる開放性、その開放性を通して都心機能を公園内に取り込んで境界線を消していくような運動が必要であったと思う。そうしてはじめて「にぎわい」「くつろぎ」「文化」が自然な形で生まれるのであって、個々の施設整備がそれを生むのではない。

サッカースタジアムの建設に反対ではないし、場所の変更も政治的リアリズムに欠けるのであろうから、あえて異論を唱えない。ただし、注文はある。少なくともそれが、求められる中央公園の魅力化にどう貢献するのか、市営・県営基町アパートの跡地活用や商工会議所の建て替え、紙屋町周辺の再開発動向などをどう総合的に見通したプログラムなのかを明らかにしてほしい。それらが、タイミングが違ふとか、所管が異なるとかという理由で無視されたのだとすると、これまでの紆余曲折の延長にすぎない。その結果、中央公園の都市空間としての劣化はこれまで以上に甚大なものになるだろう。

□ 特別寄稿－2 大田洋子「文学碑」受難 —中央公園・サッカー場建設を巡っての問題点—

広島文学資料保存の会・代表 土屋時子

私たち広島文学資料保全の会は、2020年8月31日、広島市に対し「要望書」を提出した。これは、「大田洋子文学碑」に限定したものでありながら、「一方的に柵を巡らせ、周囲の樹木の伐採は市民感情を無視したもの」とし、多くの市民の声を聞いて欲しいとの要望にとどめた。

もともとサッカー場建設の議論は、宇品（南区）のみなど公園、観音（西区）の西飛行場跡地、旧・市民球場跡地などが候補地にあがり、二転三転し、広島市中央部の中央公園に決定したとのことだが、いずれも市民不在のいわゆるボス交渉（広島県知事、広島市長、商工会議所会頭、エディオン社長）で決めたとの印象が強い。

中国新聞（2020・2・4）は、「中国庭園の移設へ」の見出しでサッカー場建設の顛末を報じ、朝日新聞（5.27）は「大田洋子『屍の街』碑 移転へ」の記事を書いた。

それによれば、当初サッカースタジアムを中央公園東側に想定していたが、突如西側に変更し、「一部が中国庭園・渝華園にかかる可能性が高く、文学碑やモニュメントの移設も検討」とある。

変更の理由は、東側を掘削したところ広島城にかかわる埋蔵文化財が出てきたとある。しかし何が発掘されたのか、いかなる価値があるのか、報告・発表されてはいない。

本来、サッカー場建設として中央公園案が浮上した時に調査すべきことであり、「今さら何を言っているのか！」というのが正直な市民感情である。

中国庭園・渝華園（ゆかえん）は、1992年に広島と中国・重慶市との友好都市5周年を記念して開園。また、**大田洋子文学碑**は1978年、『屍の街』や『夕風の街と人』など数多くの原爆作品を残した作家・大田洋子の文学を賛え、平和への道標として詩人・栗原貞子、作家・佐多稲子などをはじめとする、全国の多くの人々の協力によって建立された。この地に建てられたのは、たびたび広島に帰省し、原爆スラムとよばれた実妹・



大田洋子文学碑

中川一枝宅を訪ね、『夕風の街と人』をこの地で執筆したことによる。さらに、設計・デザインを担当した四國五郎は、「大小十五の石を、碑文を刻んだ中心の碑石に向って、あたかも爆心から爆風によって吹き寄せられたかのように並べました。石のひとつひとつを、数千度の熱線と音速の二倍を超える爆風下に生身身を晒した老若男女に見たてながら並べました……〈夕風の街と人〉の舞台となったゆかりの地の一角から、碑石が人々への語りかけをはじめののです」（爆風の中の碑：建立記念誌）と述べている。

実は、「大田洋子文学碑」の移動は二回目である。前述の渝華園建設の折少し移動したが、それでも、碑の建立の中心者・栗原貞子には事前に丁寧な説明を行い諒解を得ている。今回担当者は発起人の一人に意見を聞いたとのことだが、移転先を北西の位置に〈想定している〉だけが判明。

（大田洋子「文学碑」への先人の思いを斟酌しない乱暴なやり方にはとても同意できない）

たしかに、文学碑は「広島市に寄付、碑および付帯する工作物はすべて市の管理に帰属」（「文学碑建立記念誌」より）とし、除幕にあたり「植樹」を行っている。（建設時のカンパ剰余金は植樹の経費に充当）とすれば、植樹された「樹木」は「付帯する」ものでもある。この一帯のこもりしていた杜の樹木は無惨にも切り取られ、唾然という言葉以外の表現が見つからない。

現在この中央公園は、「埋蔵文化財発掘調査」の名のもとに、柵が張り巡らされ「関係者以外立

ち入り禁止」とされた。この地域は、戦前、西練兵場、被服倉庫、衛戍（えいじゅう）病院、輜重（しちょう）連隊など旧・陸軍の施設が林立していた。これらの遺跡は文化財ではないのか。調査期間があまりに短いのも問題だが、発掘されたものは詳らかに公表すべきである。

今、広島は平和度・文化度が問われている。今回の、市民を置き去りにしたサッカー場建設工事は「国際・平和・文化都市」を標榜する自らの崇高な理念に逆行する暴挙であると思う。

□ 特別寄稿－3 巨大な複合施設が地域の賑わいになる条件

ダブルネットワーク(株)代表、中小企業診断士 若本 修治

広島はサッカーファンは「あの沼田の郊外だから、観客が入らないんだ。だから市内中心部にスタジアムが出来たら、世界中からサッカーファンが観戦しに来るんだ！」と、大きな期待を込めています。宇品のみなど公園じゃダメなんだと・・・。

一部の市民とはいえ、家族や子どもたちの大事な憩いの場だった都心のオアシス「中央公園自由・芝生広場」を廃止し、年間20回程度開催されるサッカーの試合に、いったいどれだけのファンが詰めかけ、どのような都心の賑わいになるのか。

写真は、東京都庁から見下ろした「新宿中央公園」です。広島は中央公園よりも知っている人は多いでしょう。JR新宿駅南口から地下道や動く歩道、超高層ビル街を通り抜けて都庁にたどり着き、街を分断するような広～い「公園通り」を隔てた先にある”都心のオアシス”です。



このロケーションをイメージして、写真の公園の先にあるビル群が、「市営住宅・基町高層アパート」と、道を隔てた右側が「広島城公園」だと考えて、この緑の公園の半分をサッカースタジアムにしたら、周辺地域まで賑わいが広がり、多大な税金投入するのにふさわしい集客施設として、20年後30年後も都心（ここでいえば新宿駅南口周辺）に賑わいをもたらす続けるかという話です。

しかも昭和の時代の大型商業施設は、駅前商店街や中央通り商店街など、ほぼ商店街の中と言っていい場所に出店し、マグネット施設としてお客を吸い寄せ効果を発揮していました。当初商店街の店主たちが出店を反対していたのが、誘致するまでになったのです。

平成以降の大規模商業施設は、以前の食品スーパーやGMS（総合スーパー）といった「小売業態」ではなく、映画館や様々な娯楽施設も入居した『全天候型アミューズメント施設』になりました。巨大な駐車場も完備し、その施設の中だけで長時間滞在してお金を落としてもらう巨大な複合施設です。駐車場に入る車は渋滞し、ほぼ近隣の小規模店を利用する人はなく、その大型複合施設だけが目当ての来客がほとんどでしょう。

年間20日くらいしか試合のないサッカーだけでは、賑わいが作れないから、様々な物販や飲食店、エンターテイメントなどもテナントとして入居させ、都心らしい大型の複合施設にすれば、紙屋町周辺の地元の買い物客や、原爆ドームに訪れる観光客なども、足を延ばしてくれるかも知れない。だから自治体だけでなく地元経済界や地元商店街を上げて「都心の賑わいづくりの起爆剤だ！」と期待しているのが今の現状でしょう。

これから人口は減少し、高齢化によって特に地方の購買力は落ちていきます。また、これから先の10年間は、過去30年間の変化よりも大きな変化でしょう。本当にこんな場所に大型の複合施設をつくって、この場所に継続的に人が集まるのか？さらに言えば、ここに集まったとしても全天候型の施設で楽しんだだけ、この場所だけで完結してしまわないのでしょうか？

私の想像では、施設自体も賑わいが続かないでしょうし、全天候型の大型複合施設で滞在時間を延ばすほど、周辺への経済効果は限定的だというのが今の予測です。

その予測どおりにならないために、何をすべきか・・・。

そして建設費が膨らむほど、家賃設定が高止まりし、当初大都市圏の有名チェーンを誘致して、その後撤退した時に、家賃を下げられず空きテナントばかりになるか、減資をして借金を自治体がかぶっても債務超過が続く地下街のシャレオや、不動産信託が失敗して大和ハウスグループにかろうじて売却できた県所有のクリスタルビルのような未来になるのか。

私は県議会や市議会がしっかりとチェック機能を果たしてもらいたいと願います。決してサッカースタジアム建設自体を反対しているわけではなく、現在の計画立地と投資額が適切かどうかを聞きたいのです。

ひろしまのまちづくりの動き

① サッカー場建設費が9月市議会を通過、事業者公募！

広島市議会は9月定例会でサッカースタジアムの本体工事費 257 億 400 万円を確保する補正予算案を可決。ただし、県と市の負担割合は合意しておらず、「早急に県と協議して合意事項を文書化すること」を付記している。

一方、広島県は中四国地方の広域的な集客と県全体の活性化及び中枢拠点性を求めており、今の段階では具体的な姿が見えず負担割合は白紙の状況という。

市は昨年度約5千万円をかけてサッカー場基本計画案を検討したが、具体的なイメージが描けず、芝生・自由広場の西側にスタジアム本体を置いただけの配置図を公表した。

今年度は民間事業者からの提案を求めるデザインビルド（設計・施工一括発注）方式で事業者を決めるというが、県の条件を満足させる提案が出てくるか甚だ疑問である。

3万人収容のスタジアムを配置すれば、本体周辺はアクセス用のスペースで占められる。施設の西側と東側に計画されている広場エリアは大幅に縮小され、これまでの緑豊かなオープンスペースは確保されないであろう。市民がくつろげる都市公園の機能は減退していく。

今後のスケジュールは来年2月までに事業者を公募し、3月末に優先交渉権者を決める予定。2024年の開業を目指しているが、順調にいくか？どんな提案が出てくるか楽しみである。

□ ほっとコーナー

online 話奏会（わそうかい）

左手ピアニスト 瀬川泰代

「[online 話奏会\(わそうかい\)](#)（*リンク参照）」というオンラインイベントを、今年4月から月に1度から2度開催している。全国(世界)各地に在住の方が参加できる、演奏会とも異なる参加者が主役のコンサート付き参加型座談会だ。

私は普段オーストリアに在住し、国内外で左手のピアニストとして演奏活動を行なっているが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で外出禁止期間を経て3月に日本に緊急帰国、早半年が経つ。

日頃は演奏会も全て延期になった。友人と一緒に食事や買い物にも行くこともできない。人との距離を保ちずっと家に篋っていたオーストリアの外出禁止期間と日本での自粛期間は日常から生の音楽が遠のくことの悲しさに等しいほど、「人との繋がり」が希薄になる寂しさも感じた。

そのような経験から制限された環境下でも、孤独な想いを感じさせない、皆に愉しんでもいただく何かを提供できないだろうか考えたイベントが「online 話奏会」である。

副題は「左手が繋ぐ、音楽のある世界」。左手のピアノ曲を聴きたい限定10名のお客様が自宅で約40分間の演奏の生配信を鑑賞する。その後、ビデオ会議機能を通して日常をテーマに、思うままに語り合うという内容だ。

従来の演奏会は私だけが発信するものであるが、奏と話を組み合わせた「話奏会」は、参加者主体で発信してこそ成り立つものである。演奏以外では私はファシリテーターの役目を務める。

これまでのテーマは「各地の新型コロナウイルスの状況」「ご当地のお勧めを教えてください(食べ物・イベントなど)」「今頑張っていること、これから挑戦したいこと」「忘れられない旅」等である。

話したい方が参加することから、沈黙することもなく楽しく情報共有することができる。特に、各地のご当地の食べ物の話は盛り上がった。私も日頃応援して下さる方がどのようなことを考えて行っているのか、知ることができてとても嬉しい。左手のピアノ曲も以前より身近に感じていただいているのではと思う。

いつの日か参加者全員と演奏会でリアルに再会できることを願って、参加者の笑顔を想い、今後も楽しく継続したい。



online 話奏会中の画像写真

○ 広島市中央公園を考える⑩ (完)

広島中央公園グランドデザインの提案

～被爆 100 年を迎える平和都市広島を選択～

建築家 前岡智之

I. はじめに

この時期に広島中央公園グランドデザインの提案は、ともすれば広島県、広島市、広島商工会議所の推進する広島プロサッカー場の建設に反対するためと受け止められがちだが、私のグランドデザイン検討は、2013年に始めて今に至っており、その都度多くの方々の提案もあわせてこのメルマガに掲載を続けて現在に至っている。

プロサッカー場の建設を前提としたグランドデザインとはオルタナティブ(比較検討し選択すること)となり得る提案である。ここにその要点を述べる。

II. 基本方針 (コンセプト)

☆ 平和への祈りと祭りを連続して体験でき、市民のみならず世代を超える国内外の人々が出会い、交流する空間とする。

☆ 原爆ドームを訪れた外国人が必ず立ち寄り、広島の歴史や日本文化に触れ、お互いの国の理解を深め合う国際文化交流機能をもった空間とする。

☆ 市民の日常的な様々な用途に利用できる可変性のあるオープンスペースとする。

中央公園の今後の活用に係る基本方針 2020.3(広島市) (*リンク参照) では、-----欧米の成熟した都市の類似例に見られるようなシンボリックな空間となるよう-----

III. 7つの提案

提案 1. バスセンターの旧球場地下階へ整備

郊外バスとそごう、アクア、広島センター地下商店街通りシャレオを直結する画期的な都市施設である。

老朽化やスロープの景色解消のため新交通システム、市内電車、そして地域の駐車場と機能的に連携し、スムーズに出入りできるように中心市街地の心臓ともいえるバスセンターを旧球場地下階に整備する。

鯉城通り交差点から南下し、駐車場位置から地下に入る。

現在のバース数を確保し、観光バス発着場も併せて整備する。

そのため、直径 100 程度の円形バスとし、地上レベルは、市民ひろばとする。



広島中央公園の整備目標十か条チェック 計画・整備はこれに照らしてから

- ① 世界平和を希求するひろしまの役割を果たしていけるか ○
- ② 都心公園として誰でもいつでも自由に利用できるか ○
- ③ SDGs を実現していくべき動きに同調しているか ○
- ④ 復興エネルギーを後世に伝えるか ○
- ⑤ 予測出来ない都市災害に対応できるか ○
- ⑥ 都心地区の賑わいや利便性に貢献するか ○
- ⑦ これまで、いま、これからを感じさせるか ○
- ⑧ 既存の整備施設の再編に合理的に機能するか ○
- ⑨ 平和記念公園と一体化する景色が形成されるか ○
- ⑩ 半径 1 キロ以内の居住者の生活空間に組み込めるか ○

提案2. 河岸民有地を公園に(ガガポン再開発)

河岸民有地を公園区域に編入し、元安川に沿って市民ひろばを大きく開放する。

メルパルク広島、そごう駐車場、バスセンターそしてNTTと続く一帯は、明日のひろしまにふさわしい都市空間に変えていくためガガポン再開発をする。

ここに商工会議所、護国神社所有地等の代替空間を集中する。再開発施設は市民ひろば方向に開かれたプランとする。

提案3. 回遊性の向上

旧球場跡地の半地下にバスセンターを整備し、その上部を市民ひろばにすることにより、そこは絶えず人の流れを呼び込み、吐き出す街のコア(心臓機能)となる。

市民ひろばのレベルからペDESTリアンデッキで公園内の各エリアを結ぶ。東側の商業施設とはアーケード空間で連結し、原爆ドーム側とはアンダーパスでつなぐ。

市民ひろばのレベルは河岸の土手のレベルとし、南の電車通り側からはなだらかなスロープでアプローチでき、河岸に向かっては河川敷のレベルまで緩やかに下って開かれ、ドーム側へのアンダーパスに続く。

提案4. 公共施設の再整備

この一帯に現存する広島市青少年センター、広島市こども文化科学館、ファミリープール、グリーンアリーナ、広島市中央図書館等の多くは老朽化している。

悲惨な焼け跡から文化的生活が営める街へと復興する間に、他の都市と変わりない平凡なものになった。

これらの施設を再編するにあたって、「**平和を生み出す工場**」であることを求める。バラバラに整備するのではなく有機的な機能構成のもとで段階的に整備を続け、世界のこどもから青少年が集い最先端のメディアを通じて世界の施設とネットワークし、自由に自他の歴史・文化の情報

のやりとりができ、学習し、使いこなせる施設群としてイメージする。(例えば、ユニセフ+α)

※ユニセフ+αビジョンとは、

世界の平均年齢は30.9歳、日本は48.4歳、アメリカは39歳、中国は39歳、インドは29歳、アフリカは19歳、時間の経過とともに世界の主人公が変わるこうした中で日本のとるべき戦略とは世界の子供たち

提案5. リバーウォークの拡充

市民ひろばと河川敷に開かれた緑地帯はオープンカフェ等の店を配置し、現芝生広場に親水広場を設けて空間的に連結する。

河岸に人の流れを呼び込み、河岸全体がみんなのものとして生かされ、川の恵に感謝して綺麗に、大事に使われる。

提案6. 河川街の整備

河岸に沿って洒落た店舗を適宜配置し、河川街として整備し、河岸の雁木を利用した川の駅を設け、周辺にトイレ・休憩所・売店・カフェ等を整備する。

雁木タクシーや瀬戸内海の遊覧船の船着場を整備する。

提案7. 基町高層住宅の再整備

当高層住宅団地のもつ空間的魅力を再考する。設計者大高正人氏は、まちと住宅の連結を強く意識し、建築空間の「社会化」を計画の理念の中心に置き、中央公園と一体となる「都市的空間」の実現を図った。

屋上庭園、ピロティ、学校、幼稚園、商店等を備え、立体的にグルーピングされた住戸群は新しいコミュニティが誕生する期待に満ちている。公的住宅の枠組みを超えて、ピロティ空間及び屋上階庭園の公開(建築空間の「社会化」の実現)を提言する。

居住や研修滞在を併せ持つ国際色豊かな地域づくりを積極的に推進する。ピロティや外部から屋上庭園に直接アクセスできる縦動線を設け、誰でも自由に利用可能とする。

IV. おわりに

メルマガへの掲載はその読者(現在600名)に直接届くものであるが、この課題は広く広島市民全員の課題である。この掲載をきっかけとして情報が広く拡散し、さらに議論がなされ、被爆100年を迎える時、平和都市広島市民が復興の歴史を思い、私たちの孫子に伝えられる選択を希求していくことを願っている。復興からの過程を経て世界に誇れる都市公園空間を獲得した。この都市空間は、平和記念都市建設法の下で世界のだれもがいつでも自由に利用できるものであるはずで、決して一部の市民や企業のためにあるのではない。

さあ冷静に勇気をもって後悔のない選択をしようではないか。

なお、この提案はこれまで多くの方々からの意見・提案によっていることを記す。

私有空間を生かしたまちづくり

安田女子大学教授 博士（工学） 藤本和男

日本の少子高齢化が進んでいる。このため、超高齢社会を迎えた我が国において、都市に老後の自由な生活を愉しめる魅力的な空間が必要とされている。一方、ヨーロッパの諸都市をみると、歩道や広場の公空間を私的に利用したレストランやバー、オープンカフェのように、人々が日常的に利用し、楽しめる魅力的な歩行者空間をもつ都市が数多くある。

アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグは、その著書「The Great Good Place」で、都市生活の拠り所となる大切な居場所が失われていると警告し、都市の魅力を高める概念・哲学として、「サードスペース」という憩いの場所が必要だと言った。また、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響を受け、市民生活においても屋外空間活用への意識変化が起きている。

しかし都市を変えていく場合、道路や広場整備には予算も時間もかかる。現在あるインフラを変えずに地域住民が利用できる空間を工夫するには、公共空間に対するこれまでの考え方を少し変える必要がある。

筆者はこれまで、街の賑わいのためには公と私の境界を明快なルールのもとで公私が連携し、空間の柔軟な利用を可能とした領域（公私重なり空間）が必要だと言ってきた。

広島市の京橋川河岸の地先利用型（写真1）は、公空間と私空間の境界領域を一体的に整備して、これを誰もが自由に利用できるようにしている事例のひとつである。

同様の空間に公開空地がある。しかし、公開空地においてはこれまでは他の公空間と同様、そこでの占用を禁じていたため、夜間ともなると人気のない寂しい空間となり、防犯上も問題となっていたが、最近では神田錦町トラッドスクエア・GOOD MORNING CAFÉ（写真2）のように柔軟な利用をしている例が出てきている。

広島市中心部に位置する中区内に公開空地を設けた建物は36件あるが、その中でも定期的にイベント等で活用しているひとつに「アーバンビューグランドタワー」がある。この公開空地では月に1回地産地消で地域を活性化するためのイベントとして「上八丁堀グランマルシェ」（写真3）を開催しており、夏にはピヤガーデンなども実施している（写真4）。また、2015年から毎年ドイツスタイルの「ひろしまドイツクリスマスマーケット」（写真5）を12月中旬に3日間実施している。

アーバンビューグランドタワーの公開空地活用による賑わい効果を見ると、通行量分析では、最大2.8倍の高い賑わい創出効果が認められた。周辺住民と利用者による意識調査でも60～82%の人が街の周辺の賑わい創出に役立っているという評価であった。また、この場所以外の公開空地についても活用した方が良いと考えている割合が76～81%と高かった。

高齢者（60代）では、公開空地をイベント等に活用することに対して88%と最も高く評価し、若年世代に比べて公開空地を日常的に利用していることも明らかになった（筆者研究室 室谷早紀調査）。

今後、公開空地の活用を進めることは、街の賑わいや高齢者が都市の中で快適な生活を送るうえで有効であり、都市施設として公開空地を活用していくことが期待される。



写真1 京橋川・地先利用型



写真2 GOOD MORNING CAFÉ
錦町 (HPより)



写真3 マルシェ開催の様子



写真4 ピヤガーデン開催の様子



写真5 クリスマスマーケット開催
の様子

○ 読者からの投稿

中央公園はだれのもの

読者 六百田裕子

2010年の夏頃から私は、中央公園へ月2回、通い始めた。西側の大きなケヤキ群の木陰で、晴れの日も雨の日も雪の日も、こどもたちと遊んだ。大人は芝生の上で緩やかに過ごし、寒い日には火を囲み、遊ぶこどもらとのちょうど良い距離感が少しずつわかってきて、大らかに見守るコミュニティが育っていた。「もとまち自遊ひろば」(*リンク参照)という不思議な空間だった。

この度のコロナ感染防止のため中止となるまでに、189回、のべ12,330人のこどもが遊びに来ていた。保護者・スタッフ・ボランティア等を含めると約2万人だった。

2019年12月31日の中国新聞に、「大きな器 新風」という見出しで、広島市と広島県、広島商工会議所、J1広島で新スタジアム建設の最終候補地を中央公園自由・芝生広場とすることに合意したことが掲載された。その時にはまだ、大きな器は「東側」だった。

年が明け、2020年1月20日に、『中央公園へのサッカースタジアム建設にあたり「もとまち自遊ひろば」継続のための要望書』を「もとまち自遊ひろばの会」として、事業委託元である広島市こども未来局へ手渡した。「もとまち自遊ひろば」の存続と継続に加え、工事中の代替地の確保を要望するものだった。当初私は要望書の中で、自遊ひろばを構成する4つの要素をあげ、(スタジアムが建設され自遊ひろばのエリアに影響が出たとしても)その要素の維持を求めることで、遊び場の存続をはかりたいと思った。しかし、**要望書を書き進めるにつれ、自遊ひろばは、単なる遊び場ではなかったことに気付いた。**約10年かけて育ってきたコミュニティがあり、人と環境と偶然が、自然と重なって生まれたこの場所は、**唯一無二のものであることをその時知った。**

担当者は、「広島市は自遊ひろばの継続を望んでいる。」と同時に「自遊ひろばとして使っていた場所(西側)は、唯一無二の場所ではない。」と言った。そして、こちらの希望通り要望書は、サッカースタジアム建設担当の整備課へも渡すと言った。

2020年1月30日に市が公表した「中央公園サッカースタジアム(仮称)基本計画」では、「西側」配置と記載されていた。これに関して、広島市は、市民からの意見を募集した。私は、市民ひとり一人の声をあげてほしい、と呼びかけた。結果は、市ホームページに公開されている。応募件数は305件(167人・団体)あった。

「6.3広場エリアの整備計画」について、こんな意見があった。『中央公園広場は街中には珍しい広大な敷地であり、小さな子どもが安全にのびのびと遊べる絶好の場所である。子どもの遊び場がどんどん無くなっていく今日、中央公園広場のような街中で緑あふれる自然とふれ合える貴重な環境はととても大事だと思う。スタジアム建設には賛成できないが、建設されたとしても、これからの将来を担う広島子ども達のために、中央公園が「誰もが自由に自然と触れ合える場」として自然環境を残すことを望む。木や川、池にはたくさんの生き物がいるので、できるだけ無くさないでほしい。』(同意見27件)

それに対する市の回答は、意見の趣旨を基本計画に反映させるものとして、『第6章6.3.1広場エリア整備の方向性』に、子どもの遊び場や自然にふれあえる場としての機能を維持する旨の記述を追加しました。』とあった。

2020年3月13日、私は広島市長宛てに申入書をメールで送り、受付担当課へ電話をした。中央公園という環境を活かし「こどもの自由な遊び場」づくりに関わり続けてきた人々—こどもも含めた公園利用者である市民一へ、誠意をもって対応していただくよう求めた。

今、中央公園では2024年の開業を目指し、コロナ禍の中で作業が進められている。西側エリアを高さ約3mのフェンスで囲み、芝生を剥ぎ取り約100本もの樹木の伐根・伐採を終え、スピーディーに着々と進んでいる。私は、その**作業風景**(*リンク参照)を心に刻んでおこうと思っている。見ておこうと思っている。被爆100年後の広島にどんな風景があるのか。こどもたちへ何を残すのか。

私は、自分たちの手で土を耕したいと思っている。中央公園はどうやら、私たちの遊び場ではなかったようだ。私は、自分たちの場所に仲間とアソビ場をつくっていききたい。



中央公園西側エリア 作業風景

□ 編集後記

広島サッカー場をPRできない理由

今号は記念すべき第50号で一つの区切りとして広島サッカー場建設問題を特集に組みました。2011年に中央公園の在り方を問う市民参加型の[アイデアコンペ](#)（*リンク参照）を実施し、その延長線で2012年からメルマガ「まちづくりひろしま」を配信し続けてきました。その間、サッカー場問題は右往左往して迷走し、今の状況に陥っています。

広島市は9月市議会にサッカー場建設に関わる補正予算を提出し、条件付きで可決されました。建設予定地の中央公園芝生自由広場は仮囲いされ、樹木伐採を終え、埋蔵文化財発掘調査をしています。その間、マスコミは議会関連などの記事を取り上げる程度で、どんなサッカー場が計画されているのか、その中身にはあまり触れようとしません。市からの情報が少ないからです。

市の方も話題にされることを避けるがごとく、発注手続きを粛々と進めています。サッカー場建設に市民の理解を得るためには、旧市民球場跡地活用と同じように分かりやすいイメージパースなどを公表するのが通常です。そうしなければ市民からの寄付など協力は期待できません。

市は当然PRしたいのですが、できない理由があるのでしょうか。市は昨年度コンサルに約5千万円かけて[サッカー場基本計画](#)（*リンク参照）の検討をしましたが、美辞麗句の抽象的な表現に終始し、具体的なイメージが描けませんでした。否、描いたとしても公表できませんでした。

その理由はイメージ図を公表すると芝生自由広場の環境が壊され、巨大な箱ものが周辺に多大な影響を与えることが自明の理となり、市民からの反発を恐れたからだと推察します。

そして今年度は民間事業者からの提案に期待してデザインビルド（設計・施工一括発注）方式を採用することにしました。昨年度の検討を上回るようなアイデアが出てくることを期待しますが、3万人収容のスタジアムと日常的な賑わいの場づくりを都市公園の環境を壊すことなく、この敷地に造ることは至難の業です。

狭い敷地に多機能な施設を備えたスタジアムが誕生することにより、どのような影響を及ぼすか、環境アセスメントを公表することなく事業を進めている市のスタンスに大いに疑問を持ちます。デザインビルドによる事業者選定をしたとしても、環境アセスメントをクリアできる提案でなければ、周囲に公害をもたらす施設になりかねません。

みなと公園の場合、周辺の物流関係者から猛烈な反発があり、すぐ計画を撤退させましたが、中央公園の場合、同じような交通渋滞が発生しても、今の段階では市民は異を唱えません。

サッカー場を西風新都から交通の便の良い場所に移すことに賛同署名した約37万名の人も、中央公園に移設することに賛成する人は熱心なサンフレッチェ広島ファンぐらいで、多くの人は中央公園の環境を壊してまでの移設に賛同しないのではないのでしょうか。

一般市民も中央公園にサッカー場ができることにあまり関心はなく、もし作るなら日常的に市民に利用される施設にして欲しいと要望している程度です。その要望に応えられる施設づくりが可能ならば、良しとするが、今のままではできない可能性が高く、市も説明できない状況です。

市の担当者は本気でこの事業を進めようとしているのか疑問です。市長の決断だから仕方ないとあきらめて事務的に手続きを進めているようにも見えます。

もっと広島市民のために、広島の未来のまちづくりのために胸を張って仕事をしてもらいたいと思います。

（編集委員 瀧口信二）

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会（第30回）」開催

- ・語り人：赤十字・原爆病院副院長 松田 裕之 氏
- ・テーマ：新型コロナウイルス感染症の特性と新たな生活スタイルのあり方
- ・開催日：2020年12月5日（土）15：30～17：30
- ・会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ 研修室C（北棟5階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加申込：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！
(投稿は500字程度でお願いします)**

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表